

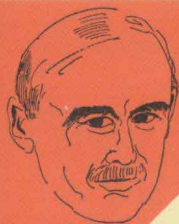
近代経済学の群像

● 人とその学説

代表的近代経済学者は、どんな時代・環境に生まれ、どんな学問遍歴をかさね、どんな考え方をもって生きたのか。すぐれた伝記は、その人の学説そのものにも新たな興味を抱かせる。

近代経済学を確立し、発展させた群像の生いたちと思想・学説を描き、近代経済学誕生の背景とそのエッセンスを伝える名著。

都留重人



日経新書
1



近代経済学の群像

日経新書 1

都留重人 (つる・しげと)

1912年：大分県に生まれる

1935年：ハーヴァード大学経済学
部卒

1947年：経済安定本部総合調整委
副委員長

1948年：東京商大教授

現在：一橋大学名誉教授

専攻：経済理論

著書：『米国の政治と経済政策』
(有斐閣)『平和を求める
日本経済』(弘文堂)『国
民所得と再生産』(有斐
閣)『経済の論理と現実』
(岩波書店)など

住所：東京都港区赤坂8-11-4

〈検印省略〉

昭和39年9月10日 1版1刷

昭和52年6月20日 20版1刷

昭和56年4月30日 4刷

著者 都留重人

© Shigeto Tsuru 1964

発行者 黒川 洸

印刷・奥村印刷

製本・トキワ製本

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町1-9

振替東京3-555 電話(270)0251

(分)1233(製)2001(出)5825

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を
除き、著作者・出版社の権利侵害になります。



日経新書 1

近代経済学の群像・人とその学説
都留重人

日本経済新聞社

装丁
代田
獎

まえがき

学界に大きな足跡をのこした先人の伝記を調べるのは楽しいことである。書物や論文の形で世に出ているものだけに親しんできた相手の著者が、どんな環境に生まれ、どんな学問の遍歴をかさね、専門分野以外の問題についてどんな考えをもち、どんな結婚をしてどんな子孫をのこしているかを知ってみると、ふりかえって、その著者の学説そのものにも新たな興味がわく。伝記を読んで学説に興味をいだくなどというのは、純粹科学では邪道の部類に属することかもしれないが、科学としてまだ不完全な経済学では、これを邪道とは言えなからう。

しかし、それはともかく、大きな業績をのこした人の伝記が私たちに教えるものは、もっと一般的な人生教訓である。私たちの専門の仕事がなんであれ、あるいは学問の道にたずさわっていない人たちにとっても、傑出した人の伝記は、人間の可能性とともに、偉業のかげの曲折にみちた辛苦をつたえて、私たちの心を何とはなしに新たにさせる。それは刺激ともなり、反省の鏡ともなり、時にはえりを正させ、時には快哉を叫ばせ、最後には、人生行路を積極的に切りひらいてゆく人の姿のきびしさが、私たちの心をとらえるのである。

この書物を書きながら、私は、あらためて右の印象を強くした。だから、できれば、それぞれの短編話のなかで、こうした伝記のもつ効をあげたいとは思ったが、力も足りず、紙数の制約もあって、自分ながら意にみたない点が多い。せめて読者が、これを手がかりに、いっそう興味をそそられ、それぞれの注にあげておいた参考文献やその他の資料を、すすんで手にとってみる気になっていただければ、私としては望外の喜びである。

近代経済学者の群像として、ここにとりあげた六人を選んだことについては、多少議論の余地があるかもしれない。メンガーと並んでジェヴォンズがあるし、アメリカでは、フィッシャーよりもジョン・ベーツ・クラークを、という考え方もある、また、マーシャルを落としていることも、問題だろう。近代経済学の系統からははずれているが、アメリカの特異な経済学者ヴェブレンを割愛したことも、惜しかった。結局、一義的な基準で決めることのむずかしい選択なので、原則として、一国一名ということを考え、国籍を中途で変えたシュンペーターだけを、その例外とした。こんなわけなので、機会があれば、続編を書きたいと思っている。

読まればわかるとおり、「プロローグ」では、近代経済学とはどういうものかといった種類の解説をし、「エピソード」では、私自身が留学していた当時のハーヴァード大学経済学部の様をつたえ、中心部分では、六人の代表的な近代経済学者について、導入的エピソード、その一

生、その学説という構成で、伝記的叙述を行なった。各章話の扉の裏面にのせた引用は、それぞれの経済学者ごとに、あるいは処世訓であつたもの、あるいは本人が特に共感をよせたとわかつているもののなかから選んだ。

もともとこの企画は、私自身のものではなく、日本経済新聞社出版局の方々の創意にもとづく。わけでも清水保三氏の熱心な勧奨がなかったら、本書は成立していなかったにちがいない。また原稿ができあがる過程では同じく同社出版局の小出鐸男氏が、非常にゆきとどいた産婆役をして下さった。両氏には、ここで厚く謝意を表したい。なお挿絵の似顔は、ややおはずかしいが私の手なぐさみである。

一九六四年八月

都 留 重 人

目 次

まえがき

プロローグ 九

——近代経済学とは——

第一話 メンガー 二五

——オーストリア学派の父——

第二話 ワルラス 五五

——ローザンヌ学派の始祖——

第三話 ウィックセル 六七

——マクロ経済学の先駆者——

第四話	フィッシャー		一三
-----	--------	-------	----

——米国「近経」の開拓者——

第五話	ケインズ		一五
-----	------	-------	----

——新古典派を乗り越えた教祖——

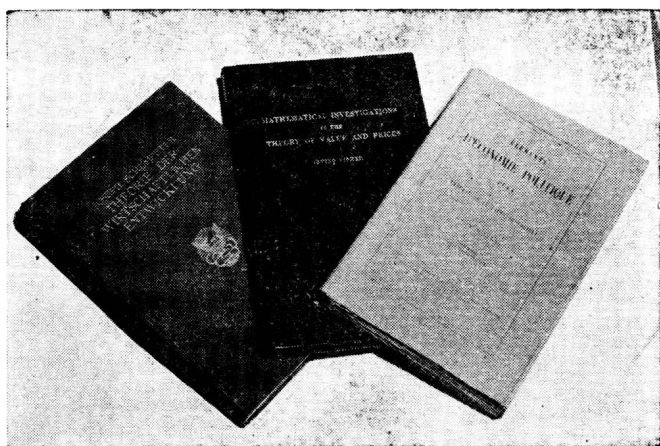
第六話	シュンペーター		一七
-----	---------	-------	----

——学派を越えた非凡の教師——

エピソード		二九
-------	-------	----

——ハーヴァード黄金時代——

〔似顔絵 都留重人〕



ブ ロ ロ ー グ

—近代経済学とは—

扉の写真は近代経済学の名著——右からワルラス『純粋経済学要論』，フィッシャー『価値及び価格理論の数学的研究』，シュンペーター『経済発展の理論』：

ある作家の
経済学観

人体について医学があるのと同じように、社会について経済学がある、とよくいわれるが、そうであるべきだというならともかく、現実の描写としては、この類推は当たらない。たとえば獅子文六氏の小説『青春怪談』を読むと、その主人公宇都宮慎一について、こんなことが書かれてある。

「かれが、大学の経済学部に入ったのは卒業後の就職に有利だと考えたためだったが、経済学という学問を教わってみると、身震いするほど、嬉しい学問だった。これは、ムダ嫌いの学問だった。ムダの反対はトクであること、いかにしてトクするかを、散々、研究する学問であった。金銭を軽蔑すべしなんて、どの先生も教えなかった。反対に貨幣というイキモノが、どういう状態で、どんな偉大な働きをなすかを、教わった。ほんとに、学び甲斐のある学問だったが、学者になることはやめた。学者はムダなことを考え、ムダなことを発表しないと、学者らしくないことになっている。」

宇都宮慎一にことよせて書かれてはいるが、これが獅子文六氏の経済学観であるのかもしれない。いや、もっと正確にいえば、「大学の経済学部」観、「経済学」観、「経済学者」観である。この三つが有機的にあまり結合しがたいものであることも、この小説は看破している。つまり、

第一、大学の経済学部というものは、「卒業後の就職に有利」という観点から選ばれる。

第二、経済学という学問は「ムダ嫌いの学問」である。

第三、経済学者というものは「ムダなことを考え、ムダなことを発表しないと、学者らしくないことになっている」。

といったぐあいに、経済学をめぐって、それを教える場所と、そのもの自体と、それを教える人とが、なんとなくバラバラになっているのだ。私はこの文六氏の意見に必ずしも全面的な賛成はしないが、大まかにいって、この文学者的洞察には、当たっている部分のほうが多い。

とかく経済学には、懷疑と分裂がつきもので、「ムダ嫌いの学問」といわれながら、**経済学の割拠性**「ムダなことを考えないと学者らしくない」という自己分裂などは、皮肉な真理である。これを医学に比べると、その違いは、はっきりする。大学の医学部にはいる学生

は、その大部分が医者になるためであり、その先生もまたたいいは医者である。そこでは、学ぶ対象と、学ぶ人と、教える人とが、混然とした統一体をなしていて、懷疑もなければ分裂もない。そして、事実、この日本の社会から、医者を全部抹殺してしまったら、たいへんなことになるにちがいないが、経済学者が全部消えてなくなっても、国民の福祉にどの程度のマイナスが生ずるか、おそらくは疑問であらう。あるいは、経済学者など、一人もいない方がよいと考えて

いる向きさえあるかもしれぬ。

「医者が病氣をつくる」という言葉があり、それも、ある程度は真だと思うが、それよりも、「経済学者の供給が経済学者への需要を生む」というのは、いっそう真である。経済学には「セイの法則」というのがあって、その意味は「供給が需要を生む」ということだが、今では、この法則は商品については成り立たないとされている。ただ、商品ではなく経済学者そのものについて、今でもこの「セイの法則」が妥当すると喝破したのは、サムエルソンであった。まがりなりにもともかく、ひとかどの体系的理論をつくりあげて「経済学の市場」に乗り出せば、だれかがそれをとりあげて論議の対象とし、一つの討論は次の討論を生むという形で、際限なく論争は続き、いつのまにかその理論は「市場性」を獲得するのである。論争さえ生むことができれば、その理論は「経済学説史」のなかに記録される。太陽の黒点が景気循環の原因だという思いつきさえ、れっきとした一理論として、学説史を「飾って」いるのである。

自然科学の分野では、客観的な自然の秩序が、人間の意志や行動とは独立に存在しているし、真否を明らかにするための実験が可能であるから、だれか一人の貢献は、他のすべてによって検証されることができ、したがってそれは万人の共有物となる。だから、学問をするものの態度も、いわば皆でつくりあげるピラミッドの礎石を一つでも自分の手ですえようという性格をと

る。すえられた礎石は、いかに小さくても、その任を果たし、他の礎石ともちつもたれつの関係で、ピラミッドを築きあげていく。

しかし、経済学の場合はちがう。一流の経済学者と呼ばれるほどの人ならだれでもが、小さいながらに、自分の城をひとりで築こうとするのだ。術語も自分流儀のものをづくりあげ、道具立ていっさいが、自分の城を守りやすいように仕立てられる。一城の主ともなれば、城を守るための「参謀」や、「家来」も養成しなければならぬ。ときどき、他流試合のために、城の外に出るが、旗色悪しと見れば、いつでも自分の城へ引きあげることができる。いいかえれば、物理学や化学のような自然科学が、市民社会的な開放性をもっているとするれば、経済学はまだ封建社会的な割拠性に特徴づけられているとでもいえようか。

もっとも、こんなことをいえば、私は現代の経済学をあまりにも戯画化することになりそうだ。たしかに現在では、経済学にも市民社会的黎明が訪れており、一人の学者の貢献が、建物の一小部分をなすれんがのように、他の学者がその上に次の仕事を積み上げていく共有物としての役を果たすような事態が、しだいに目立つようになってきた。しかし、近代経済学がここまでくるのには、たいへんな時間を要したし、その現に礎石がおかれつつある建物の設計にも、まだまだ問題がある。

社会科学としての経済学

どうして経済学では、学界共有資産の発達がかくも遅れたのであろうか。経済学も、社会科学、すなわち科学ではないのか。社会とは、客観的な人間の営みで、個々の人間は自由意志をもっていて、それぞれに自分勝手なことができると思っているかもしれないが、多数の人間をもって構成されている社会は、歴史的な道行きをもち、いろいろな要素の規定を受けて、客観的な法則性をもった動きをするのが普通ではないのか。そうだとすれば、自然科学のような実験こそできないかもしれないが、その客観的な法則性は、明らかに客観科学の対象であり、共通の対象に対する共通の科学的探究は、共有物の確認・蓄積という形で、経済学の進歩をもたらすはずであった。

ペティ（一六二三―一六八七）やケネー（一六九四―一七七四）などの先駆的な仕事にはじまって、スミス（一七二三―一七九〇）やリカード（一七七二―一八二三）において、その最高峰に達した古典派の経済学は、その名も「政治経済学」と呼ばれ、たしかに、社会科学にふさわしい発達を約束するかにみえたのである。しかし、社会科学としての経済学には、体系性がつきものである。体系をもたずしては、部分の構築ができない。そして、一つの体系をつくりあげること、凡人のよくなしうるところではない。ずっと後になってからでも、ケインズは、マーシャルに言及しながら、こんなことを書いたことがある。